様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３３９２３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００４２５

研究課題名（和文）イギリス・ロマン主義時代の性教育－女性、権利、健康

研究課題名（英文）Sexuality Education in the British Romantic Era: Women, Rights, and Health

研究代表者
川津　雅江（Kawatsu, Masae）

名古屋経済大学・法学部・名誉教授

研究者番号：３０２７８３８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：性の健康世界学会が1999年や2005年に提言した「性の権利」や「性の健康」宣言において、性教育はグローバルに取り組む課題の一つになっている。本研究では、このジェンダー平等や人権尊重を基盤とした現代的な性教育の萌芽的考えが、イギリス・ロマン主義時代のメアリ・ウルストンクラフトの近代フェミニズム思想に包摂されていることを解明し、彼女の性教育観の先駆性を検証した。また、同時代の他の女性作家たちが、ウルストンクラフトとは異なり、隠されたかたちで、多様な性教育のあり方を模索したことを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
イギリス・ロマン主義時代の女性のセクシュアリティ研究は1980年代にはじまり、多数の先行研究があるが、性の教育についての考察はまだ未着手だった。従って、本研究は、ヴィクトリア朝以降の性教育関連に目を向けた最新の性教育史研究を補う学術的意義を持つ。また、医学書や性の手引き書などが性の教育に果たした役割に注目する本研究は、女性や子ども向けの教育関連のテクストの読み直し、女性の身体教育や健康教育など、新たな課題への取り組みを促すものであり、ロマン主義時代の文化・文学研究の発展にも大いに寄与するものである。

研究成果の概要（英文）：Sexuality education has become one of the issues addressed globally in the “Sexual Rights” and “Sexual Health” declarations proposed by the World Association for Sexual Health in 1999 and 2005. My research demonstrated that the germinal idea of modern sexuality education based on gender equality and respect for human rights was anticipated in Mary Wollstonecraft’s modern feminist thought articulated in the British Romantic era, and examined the pioneering nature of her view of sexuality education. My research also discussed how other women writers at the time, unlike Wollstonecraft, explored diverse forms of sexuality education in a hidden way.

研究分野：英文学

キーワード：性教育　ジェンダー　セクシュアリティ　身体　健康　英文学　女性作家　医学的言説

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、国内外でこれまで主たる考察の対象になっていなかったイギリス・ロマン主義時代（18 世紀後期から 19 世紀前期）の性教育に焦点をあてるものである。

イギリス・ロマン主義時代の女性のセクシュアリティ研究に関しては、アナ・クラーク(1987)、エマ・ドノヒュー(1993)、キャサリン・ビンハンマー（1995)、マーサ・ヴィシナス(2004)など多数の先行研究がある。本研究者はそうした欧米の研究動向にそって、女性同性愛の様々な表象を長年研究してきた。本研究者のこれまでの研究成果によれば、18 世紀から 19 世紀前期にかけてのイギリスにおいて流布したサッポー、 オウィディウス、ユウェナリス、マルティアリスなどの古典文学における性的言説は同時代のセクシュアリティ観を形成しただけではなく、それらの古典文学を読む個人に性自認や性的指向の自覚をもたらした。また、ティム・ヒッチコック（『イギリスのセクシュアリティ―1700 年～1800 年』［1997］）らがすでに指摘しているように、18 世紀を通して何度も版を重ねた産婆術や医学書や性の手引き書は、性、生殖、身体などの科学的知識の情報源だった。それらの出版物の目的は子どもの作り方を教えることであったが、しばしば避妊法の参考書としても読まれた。このように、従来の研究では、セクシュアリティに関する知識は個々人の読書を通じて獲得されたと指摘するにとどまり、また当時の想定読者も男性に偏向する傾向があった。

一方、フェミニズム文学批評の勃興とともに、1980 年代頃からロマン主義時代の女性作家たちの作品の再評価がはじまり、彼女たちの教育論に関する研究も、女性作家の児童書における母親の教育的役割に焦点をあてたミッツィ・マイヤーの「完璧な家庭教師、理性的なご婦人、そして道義をわきまえた母親―メアリ・ウルストンクラフトとジョージ王朝時代の児童書における女性の伝統」(1989)以降、多くの先行研究がある。たとえば、アラン・リチャードソンは 『文学、教育、そしてロマンティシズム―社会的実践としての読書、1780 年～1832 年』(1994)の中で、女性作家の児童書や小説の教育的効果について一章を割き、シルヴィア・バウアーバンクは『自然を代弁する―女性と近代イングランドのエコロジー』 (2004)の中で、女性作家の作品における自然教育を分析している。しかし、これらの研究では、性の教育についての考察は全くされていない。最近になってやっと、19 世紀末の西洋に端を発し、全世界に広がった性教育史を扱う研究ジョナサン・ツィンマーマンの『厄介で手に負えない―性教育の世界史』 (2015)が出版され、また初夜や月経時などの手引き書研究テレーズ・オニールの『口にできないもの―ヴィクトリア朝レディの性、結婚、そしてマナーの手引き』 (2016)のように、性教育史の細目の範疇に入る研究も台頭してきたが、いずれもヴィクトリア朝以降を扱っており、ロマン主義時代を対象とした性教育研究はまだない。

本研究の着想は、ウルストンクラフトの女子教育論を同時代のナチュラル・ヒストリーとの関連で考察を進める中で得た。従来、ウルストンクラフトのフェミニズムにおけるセクシュアリティに対する矛盾した態度（一方では、理性による情欲の制御を唱え、性や身体に対して嫌悪し、他方では、女性の情欲を賞賛し、その解放を勧めた）が指摘されてきたが、ナチュラル・ヒストリーに対する彼女の反応を調査・分析するうち、彼女の女子教育論には性や生殖に関する教育が含まれていることを確認した。この過程で、ウルストンクラフトが（人間の）ナチュラル・ヒストリーだけではなく医学・産科学に関しても相当な知識を持っており、それらの知識と彼女の性教育の考えに関連があることが推定されるとともに、女性のセクシュアリティを脱性化する当時支配的な性的イデオロギー下において、ウルストンクラフト以外の女性作家たちが性に関す

る知識をどのようにどれほど獲得していたか、そして性教育をどのように展開したのか、あるいはしなかったのかの問題をもっと解明する必要性が認識された。

２．研究の目的

本研究の目的は、これまでのセクシュアリティ研究を発展させて、近代フェミニズムが誕生したイギリス・ロマン主義時代における女性に対する性教育の萌芽、および性教育の隠された展開を解明することである。具体的には、第一に、メアリ・ウルストンクラフトの女子教育論がいかに現代的な性教育の理念および権利思想や身体的・精神的・社会的健康の考えの萌芽を含んでいるか、第二に、その他の女性作家たちがウルストンクラフトとは異なり、いかに隠された形で性教育の様々なあり方を模索し、展開しているかを考察する。

３．研究の方法

本研究は、研究代表者が、4 年間(コロナ禍のため当初の予定期間を一年延長)にわたって、１８世紀初期から１９世紀初期までの医学書や性の手引き書などにおける性、性欲、生殖器、生殖、妊娠、避妊、自慰などセクシュアリティ全般に関わる言説を解析し、それらとの影響関係を視野に入れながら、ロマン主義時代の女性作家たちの著作物を性教育の視点から考察した。具体的には以下の三つのサブテーマを設けて、研究を推進した。

(1) セクシュアリティ全般に関する知識源

セクシュアリティ全般に関する知識源として、ウィリアム・バカンの『家庭医学』(1769)のような 一般読者向けの医学書、女性助産婦マーサ·ミヤーズの『自然の教え子』（1798）のようなメディカル・アドバイスブック、1684 年以来版を重ねたベストセラー『アリストテレスの最高傑作』やジェイムズ・グレアムの『人類の生殖、増加、向上に関する講義』(ca. 1783)のような性の手引書、18 世紀初期の『オナニア』、スイスの医師サミュエル・ティソーの英訳『オナニズム』(1769)、偽医者のサミュエル・ソロモンの『健康の手引き』(1782)のような自慰の害を説く本などを収集・分析し、 (2)と(3)のサブテーマの研究に必要な社会的影響力を明らかにした。

(2) 現代的な性教育の萌芽

ウルストンクラフトの女子教育論がいかに同時代の科学的な性の知識を取り入れながら、家庭および学校を基盤とする性教育を含んでいるかを精査し、彼女の性教育と女性の権利や健康との密接な関連の中に現代的な性教育の萌芽を見出した。19 世紀末期に進歩主義教育者のセシル・レディによって設立された男子寄宿学校アボッツホルムはイギリスで最初に性教育コースを設けたが、そうした進歩的教育の源泉はジャン＝ジャック・ルソーの『エミール』(1762)だった。本研究では特にそのことに注目し、ウルストンクラフトに対するルソーの教育論の影響を性教育の観点から再検討するとともに、彼女が翻訳したドイツのルソー的教育者クリスチャン・ゴットヒルフ・ザルツマンの『道徳の基本』 (1790)との関連も探った。

(3) 性教育の隠された展開

ウルストンクラフトの先進的な性教育論は、彼女の死後、反ジャコバン派のリチャード・ポルウェルの 1798 年の詩によって「男のような（unsex’d）」女性、すなわち、クローディア・ジョンソン(『曖昧な存在』[1995］）によれば、「性欲が異常に強い（oversexed）」女性をつくるとして批判された。しかし、性に関する科学的な情報が溢れる中、他の女性作家たちもまた社会的な性の規範の範囲内で性教育を模索し、展開したのではないかという推論のもとで、マーガレット・ジェイン・ムーアなどの著作における性、身体、健康などの表象を調査・考察し、ロマン主義時代の多様な性教育の隠されたあり方を解明した。

４．研究成果

本研究の主な成果としては、以下の 5 点の内容に大別される。

（１）結婚における性行為と生殖の重視

当時の医学書や性の手引き書などの科学的言説はいずれも、創世記の第一の法「生めよ、ふえよ」に従って、性欲は生殖のために自然が植え付けたものであり、それから人類全体が生じたと説いた。また、ティソーの『オナニズム』出版以降高まった自慰根絶キャンペーンは、生殖に結びつかない自慰は万病の原因であると繰り返し唱えた。その結果、１８世紀末までには、結婚内で生殖をもたらす性行為だけが自然であり、ノーマルであり、健康的であるという考えが支配的になり、結婚外の異性間や同性愛者間のようにそれ以外の性行為は不自然、異常、不健康であると見なされるようになったことが解明された。この知見は本研究成果のすべての根底をなす。

（２）伝統的な貞潔教育批判

ウルストンクラフトは『女性の権利の擁護』(1792)において、こうした当時入手できる科学的知識に基づいて、女子教育論を展開した。たとえば、人間には男性も女性も、結婚内の生殖のために「肉体的欲望と情欲」が生来備わっている、そういう性欲が「獣的」になるのは、「理性」によって抑制されていないときだけであると主張し、女性にだけ貞潔を押し付ける伝統的な教育を批判した。特に、スコットランドの医学者・モラリストのジョン・グレゴリーがコンダクト・ブック『娘たちへの父親の遺産』（1774）で、妻は夫に「愛情」（情欲）がないふりをすることが女性の「慎み」であると助言したことに対して、それはハーレムの女性たちが男性を喜ばせるために用いる技巧に等しいと糾弾した。これに関しては、共著『感受性とジェンダー―＜共感＞の文化と近現代ヨーロッパ』（2023）所収の「愛情の偽装―『娘たちへの父親の遺産』とウルストンクラフト」で考察した。

（３）性教育の提唱

ザルツマンは『道徳の基本』の序で、自慰の害悪を防止するためには生殖器官が生殖のためにつくられたことを子どもたちに教えるべきであると主張した。ウルストンクラフトはザルツマンの考えに賛同し、『女性の権利の擁護』で、リンネの性体系に基づく植物学や身近な小動物を通じて人間の生殖について教えることの重要性を説いた。また、彼女が理想とする学校は、自慰の温床とされていた男女別の寄宿学校ではなく共学の通学学校で、そのカリキュラムには性教育関連の科目があった。学校における男女共通の性教育を提唱したことこそが、ウルストンクラフトがザルツマンを含む同時代の誰よりも先進的であり、時代を先駆けていた点である。成果の一部は、イギリス女性史研究会第 40 回研究会(2023)シンポジウム「近代イギリスにおける性教育と女性」での口頭発表「生殖と自慰をめぐる性教育―ウルストンクラフトと（似非）科学的言説」で公表した。

（４）隠れた性教育

ウルストンクラフトの性教育は女性の身体的・道徳的健康の擁護と結びついていた。そこで、「性」、「身体」、「健康」をキーワードに、他の女性作家たちの著作における教育の言説を調査し、ウルストンクラフトとは違った、多様なかたちの性教育を考察した。成果の一部として、日本英文学会における招待発表「性、身体、健康の教育―Mrs. Mason と Wollstonecraft」で、メイソン夫人ことマウント・ケッシェル伯爵夫人マーガレット・ジェイン・ムーアのメディカル・アドバイスブック『祖母による若い母親たちへの助言』（1822）に焦点をあてて、妊婦や子どもたちの性、身体、健康に関する「祖母」の助言をウルストンクラフトの教育論の影響の観点から吟味するとともに、同時代の男性作家たちによる身体教育書との違いを明らかにした。また、『日本ジョンソン協会年報』第 44 号で公表した論文「女性と身体運動」では、プリ

シラ・ウェイクフィールドが『女性の現況についての所見』(1798)でウルストンクラフトのようにジェンダー平等の身体教育を唱えながら、母親の役割の考えにおいてはウルストンクラフトと一線を画したことを論じた。さらに、植物学が果たした性教育のありかたを探るために、エラズマス・ダーウィンのリンネ植物学の性体系に基づく詩「植物の愛」(1789)に対するウルストンクラフト以外の女性作家たちの反応を考察した。その研究成果の一部は、日本ジョンソン協会第 56 回大会（2024 年 7 月 13 日）シンポジウム「18 世紀の性と身体の諸相」で「性欲と生殖のアナロジー―エラズマス・ダーウィンの「植物の愛」とアンナ・シーワード」と題して口頭発表することが確定している。

（５）本研究に関連した研究成果

本研究に関連した研究成果としては、シャーロット・スミスの晩年の作品を中心に、動物のナチュラル・ヒストリーが子どもに与える教育的効果を探った「動物のナチュラル・ヒストリーと教育―シャーロット・スミスの『詩を紹介する会話』」（共著『十八世紀イギリス文学研究（第７号)』所収)、ジェイン・オースティンの『エマ』(1815)とジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』(1871-72)を中心に、ウルストンクラフトの女性教育論の影響の跡を辿った「女性の教育と生活の資―オースティンとエリオットにおけるウルストンクラフトの遺産」（共著『オースティンとエリオット―＜深淵なる関係＞の謎をさぐる』所収)、18 世紀の女性同性愛について論じた「ロマンティック・フレンドシップ」（共著『論点・ジェンダー史学』所収）などがある。その他、口頭発表で、メアリ・シェリーの『最後の人間』(1826)、ハンナ・モアの『現代的体制の女性教育批判』(1799)などについて論じた。

イギリス・ロマン主義時代の女性作家の性教育研究は国外でもまだ未着手のため、それを解明することの学術的意義は高い。また、こうした研究は、ヴィクトリア朝の「家庭の天使」像へと結実する女性の脱性化の社会的動きを再検討することでもあり、その点でもイギリスのセクシュアリティ研究や教育史研究に貢献できたと考えている。

今後の展望としては、イギリス・ロマン主義時代の性教育と科学的言説の関係についての本研究をより深化し発展させた研究書をまとめる予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 川津雅江	４．巻 21
２．論文標題 文学における親子離隔の表象	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ヴィクトリア朝文化研究	６．最初と最後の頁 147-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川津雅江	４．巻 21
２．論文標題 （書評）Simon Joyce, LGBT Victorians: Sexuality and Gender in the Nineteenth-Century Archives	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ヴィクトリア朝文化研究	６．最初と最後の頁 244-248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川津雅江	４．巻 9
２．論文標題 （書評）キャロル・ペイトマン著（中村敏子訳）『社会契約と性契約―近代国家はいかに成立したのか』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 女性とジェンダーの歴史	６．最初と最後の頁 72-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50827/jwhn.9.0_72	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川津雅江	４．巻 44
２．論文標題 女性と身体運動	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本ジョンソン協会年報	６．最初と最後の頁 12-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 川津雅江
２．発表標題 生殖と自慰をめぐる性教育ーウルストンクラフトと（似非）科学的言説
３．学会等名 イギリス女性史研究会第40回研究会シンポジウム
４．発表年 2023年

１．発表者名 川津雅江
２．発表標題 文学における親子離隔の表象
３．学会等名 日本ヴィクトリア朝文化研究学会第２2回大会シンポジウム2（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 川津雅江
２．発表標題 性、身体、健康の教育--Mrs．MasonとWollstonecraft
３．学会等名 日本英文学会第93回大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 川津雅江
２．発表標題 女性の教育と生活の資--AustenとEliotにおけるWollstonecraftの遺産
３．学会等名 日本ジョージ・エリオット協会第24回全国大会シンポジウム　（日本オースティン協会共催）
４．発表年 2021年

１．発表者名 川津雅江
２．発表標題 「どうして最後の女性ではないのか」― メアリ・シェリーとメアリ・ウルストンクラフト
３．学会等名 日本シェリー研究センター第29回年次大会シンポージアム（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計4件

１．著者名 山口みどり・弓削尚子・後藤絵美・長志珠絵・石川照子・川津雅江他116名	４．発行年 2023年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 316
３．書名 論点・ジェンダー史学	

１．著者名 小川公代，河野哲也，森田直子，大河内昌，犬塚元，井上櫻子，川津雅江，土井良子，原田範行，吉野由利，大石和欣	４．発行年 2023年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 309
３．書名 感受性とジェンダー　〈共感〉の文化と近現代ヨーロッパ	

１．著者名 川津雅江，土井良子，永井容子，新野緑，惣谷美智子，廣野由美子	４．発行年 2023年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 250
３．書名 オースティンとエリオット　＜深淵なる関係＞の謎をさぐる	

１．著者名 服部典之，福本宰之，内田勝， Hiroki Kubota，川津雅江，原田範行，川田潤，三原穂，西山徹，金津和美，鈴木実佳，廣田美玲，吉田直希	４．発行年 2022年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 275
３．書名 十八世紀イギリス文学研究（第７号）　変貌する言語・文化・世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関